

令和7年度国立大学図書館協会海外派遣事業（短期）参加報告書

神戸大学附属図書館

久我 彩乃

令和7年度国立大学図書館協会海外派遣事業により、日本資料専門家欧州協会（EAJRS）第35回年次大会への出席（聴講・発表）および、ルクセンブルク大公国の二機関への訪問調査を行ったことを、下記の通り報告する。

1. 出張者

山本 侑子（大阪大学附属図書館）

児玉 恭祐（京都大学附属図書館）

久我 彩乃（神戸大学附属図書館）

2. 派遣期間

令和7年9月8日（月）～令和7年9月17日（水）

3. 訪問先および担当者

Institut für Japanologie, Universität Heidelberg （ハイデルベルク大学日本学研究所、EAJRS 第35回年次大会会場）	Arjan van der Werf （EAJRS 事務局）
Luxembourg Centre for Contemporary and Digital History （C ² DH） （ルクセンブルク大学現代史・デジタル歴史センター）	Christoph Brüll （Assist. Prof）
Bibliothèque nationale du Luxembourg（BnL） （ルクセンブルク国立図書館）	Vera Seitz （Relations publiques） Ralph Marschall （Service collections numériques）

4. テーマ

デジタルアーカイブの利活用促進に関する調査（2025 EAJRS conference in Heidelberg における発表およびルクセンブルク大公国での現地調査）

5. 目的

京都大学・大阪大学・神戸大学は、デジタルアーカイブを、単に資料画像を公開する場から、学内外の研究活動により積極的に寄与し、あらたな価値を創出するリソースを発信するプラットフォームへと進化させるためにはどのような取り組みが効果的か、という共通の課題意識があった。今回の調査では、コンテンツの利活用を促進する機能開発、研究者と連携して研究成果を社会に還元する活動、デジタルアーカイブと市民との関わりを調査全体の着目点として、EAJRS 第 35 回年次大会での発表と聴講、ルクセンブルクの二機関への訪問を行った。

6. 内容

a. 日本資料専門家欧州協会 (EAJRS) 第 35 回年次大会出席 (聴講・発表)

派遣者 3 名は「京都大学・大阪大学・神戸大学のデジタルアーカイブにおける研究支援の取り組みと課題 (Research Support Initiatives and Challenges faced by the Digital Archives of Kyoto University, the University of Osaka, and Kobe University)」というタイトルで発表を行った。主なトピックは下記の通り。

京都大学：各コレクションの紹介。二次利用促進や利用実態調査の取り組み等。

大阪大学：研究者との協力による、研究支援としてのウェブサイト作成の取り組み等。

神戸大学：震災文庫の紹介。現代資料であることの課題、Findability 向上、連携等。

会場では、欧米のライブラリアンや他の出席者より、各大学のデジタルアーカイブは ERDB-JP やジャパンサーチとの連携を必ずしてほしい (格段に探しやすく・利用されやすくなる) とのことや、意外な活用ニーズ (震災文庫は、震災を背景にした文学の研究にも役に立つだろう等) 等についてのコメントをいただいた。

スライドのほかに、3 大学のデジタルアーカイブの取り組みをまとめたハンドアウト (日英併記) を作成し会場で配布した。なお、このハンドアウトはルクセンブルクの二機関でもお渡しした。

b. Luxembourg Centre for Contemporary and Digital History (C²DH) (ルクセンブルク大学現代史・デジタル歴史センター) への訪問

Luxembourg Centre for Contemporary and Digital History (以下、C²DH) では、Assistant professor の Christoph Brüll 氏より、同センターとその取り組みについてご説明いただいた。

C²DH はシチズン・サイエンスの一形態としてのパブリック・ヒストリーの推進を研究軸のひとつに据え、市民とともに歴史や歴史的言説を「ともに構築する」ことを目指している。Brüll 氏が責任者をつとめたデジタル展示「[World War II Luxemb\(o\)urg](#)」は、短い動画を導入としたいくつかの提示のレベルをもうけたり、短い文章で伝えたりといった内容の形式のありかたに加え、デザイン面でもこだわりがさまざまに搭載されている。また、コロナ禍に

おける生活を市民から投稿してもらったメモリーバンク型のプロジェクト「[COVID-19 memories](#)」は、COVID-19 という危機を記録することと、リアルタイムでどのような資料が集まってくるかの観察(リアルタイムの記録と、のちの歴史記述との間のギャップの観察)を目的としたもので、300 件以上が集まった。

C²DH は多くの外国人が在籍しており、さらには専門分野も歴史学のみならず、人類学、民族学、美術館のキュレーション等を専門とする人材が揃っている。またコンピュータサイエンス分野の専門家も在籍しており、人材面で強力なデジタルインフラをもつ。

c. Bibliothèque nationale du Luxembourg (BnL) への訪問

Bibliothèque nationale du Luxembourg (BnL) では、Ralph Marschall 氏より同館のデジタルアーカイブ [eluxemburgensia](#) に使われている AI や OCR 技術を中心にご説明いただいた。

デジタル化にあたっては、METS と ALTO を併用し、座標情報によりテキスト・文字検索とハイライトなどが可能となっている。また、[eluxemburgensia](#) の AI チャットは、ChatGPT API を活用した文書検索機能を試行中である。検索もれを防ぐため、検索語がルクセンブルク語や英語で入力された場合でも、まずはドイツ語とフランス語に翻訳した上で検索されるという。

また、古新聞などのデータ、ツール、API は、オープンデータとして [data.bnl.lu](#) で公開提供し、広く活用されるようにしている。2021 年に BnL が開発した、Nautilus-OCR も公開されている。

説明の後は、Vera Seitz 氏より館内をご案内いただいた。エコロジー意識の高い設計となっていたのが印象的だった。

7. 所感

EAJRS 第 35 回年次大会は、ハイデルベルク大学の CATS Library の見学も含め、欧米図書館のコレクションやライブラリアンの視点に触れる大変貴重な機会だった。C²DH では、訪問全体を通して、市民と歴史を「ともに構築する」パブリック・ヒストリーのプロジェクトは、さまざまな分野やバックグラウンドの人がともに学び、協力することにより実現していくものであるということを実感した。BnL では、技術面の知識の収穫はもちろんのこと、ルクセンブルク資料はデジタル化・公開により広く伝え、非ルクセンブルク資料(貸出可)は [a-z.lu](#) というディスカバリー検索(参加館蔵書の横断検索も可能)を通して大学所蔵資料の補完的存在とするという、蔵書の構成のあり方もとても印象的だった。

また、京阪神から 1 名ずつの参加となったことで、課題の共有やその解決にあたって相談しあえることを実感できたのは、今後業務をすすめるにあたって大きな収穫だった。引き続き、機関の枠を超えた大学間連携により、図書館をめぐる諸課題の解決にあたっていきたいと考える。